

## 特別展 <sup>やまい</sup>病退散 — 江戸の知恵と医術 —

練馬区立石神井公園ふるさと文化館 2019.09.14～11.04



江戸時代の人々の健康への願いと探求が、現代を生きる我々のヒントとなるとされ、現在は、医学が進歩して多くの「病」が治療できるようになったが、人々は健康の尊さを再認識し健康に生きるために模索をして、体に良い食生活についての情報が数多く話題にされている。

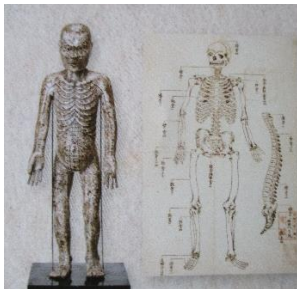
そのルーツを辿ると、「中国から伝わった漢方の知識」や「江戸時代より人々に受け継がれてきた生活の知恵や工夫」に辿りつくが、一体、「魔除!?!」「薬?」「医学?」の何れであるのだろうか?少々疑問である。

本展は、「およそ 200 点の資料」を展示し、花岡青洲が行った乳癌手術の症例図《南紀青洲先生治療乳岩奇核之図》、江戸時代の写實的に内容的にも最も優れていると評価される解剖図《解剖在真図》などから医術の発展を追求している。

また、「貝原益軒」『養生論』の養生書や、天然痘の病児への見舞い品として作られた《疱瘡絵》等から、当時の人々の養生の考え方や病の紹介がされている。

これらの江戸時代の人々の健康への願い・探求が、現代人である我々の生活のヒントになっていることを指摘していることに非常に興味がある展示である。

《房事養生鑑 (ぼうじょうじょうかがみ)》 部分 19世紀 (江戸時代) 上図  
作品は、画伯「歌川国貞」が人体の臓器の働きを擬人化して、体内の様子をコミカルに描き表したもので、当時は悪い病気は飲食と房事 (性生活) の不摂生で起こると考えられていたことから、その二つを正しくして健康で長生きしようといった趣旨で描かれたものとされ、特に腎は精神の宿る命門であるとされた。



経絡人形・解体約図  
江戸時代・1773年

世の中万病りやうち所  
順天堂・日本医学教育資料館

はしかの毒合戦  
1862年 江戸東京博物館